Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P66

紙芝居に関する研究

～保育現場における活用状況および意識調査～

水出　千尋
（育英短期大学 幼児教育専攻　専攻科）

Ⅰ．はじめに

テレビの普及と同時に街頭から紙芝居屋さんが姿を消しても紙芝居は活動場所を、幼稚園や保育園、図書館などに移し生き続けてきた。1983年7月には「子どもの文化研究所」などが中心となって、「第一回全国手作り紙芝居まつり」が開催され現在も各地でさまざまな催しが行われている。群馬県では、2002年7月20日～9月1日まで、群馬県立土屋文明記念文学館で、"第19回特別展「紙芝居展」紙芝居がやってきた"が行われた。企画は、紙芝居の現在・過去・未来と幅広く取り上げられ、これほどに、資料と内容が充実した企画は今までになかったという声が上がるほど紙芝居について深く追求された企画展であった。また、県外からも反響があり、企画展巡回の計画案も立てられているという。特別展終了後、群馬で燃え始めた「紙芝居」に対する熱意の火を絶やさぬようにと、各方面の関心のある方々が集まり、紙芝居という共通のキーワードで議論を出し合う会が生まれた。この会には、児童文化評論家や紙芝居作家・俳優・メディア関係の方々も集まり、多方面から紙芝居について熱心に議論している。その中で筆者は、実際に一番紙芝居を活用している保育現場での紙芝居に関する使用状況を知ることが、今後の紙芝居を捉えていく上で必要であると感じた。

今回の研究の目的としては、これらの動向に対して、群馬県内の幼稚園・保育園（保育所）での紙芝居の使用状況・意識調査を行い、その現状を知ることで、今後の紙芝居の発展のための基礎研究にしていきたいと考えている。

Ⅱ．調査方法

(1)調査対象：群馬県内の幼稚園・保育園（保育所）
(2)調査方法：郵送・訪問による無記名アンケート方式
(3)実施年月：2002年12月
(4)回収状況：幼稚園　36園、保育者148人
　　保育園　39園、保育者312人
　　合計　75園、保育者460人

Ⅲ．アンケートの結果

※注：以下　幼稚園＝（幼）、保育園･所＝（保）とする

図1　年齢の割合

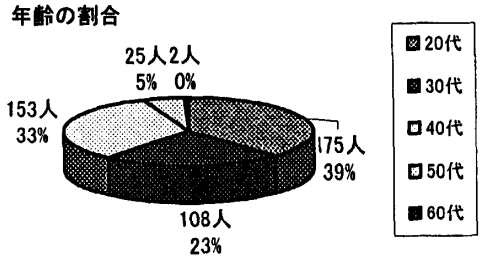


図2　演じてもらった相手の比率

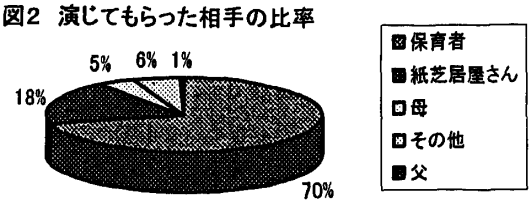


図3　舞台数の比率

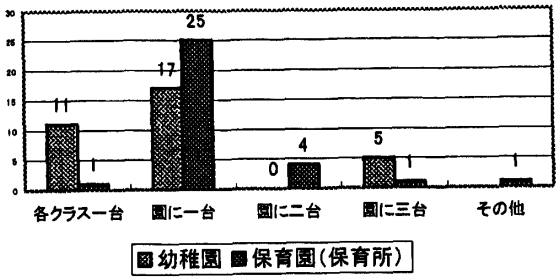


図4　事前準備方法の割合
（複数回答）

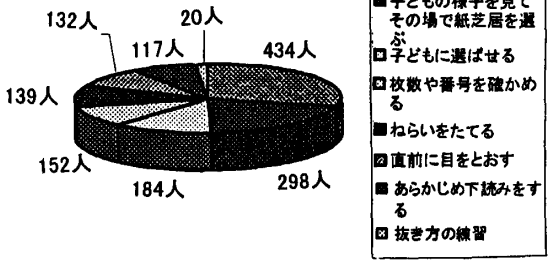
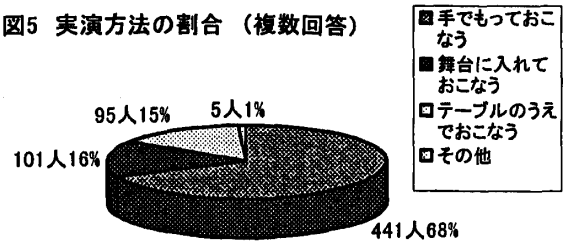


図5　実演方法の割合（複数回答）



Ⅳ．アンケートの考察

※注：以下　紙芝居舞台＝舞台とする

演じる際に紙芝居を枠の中におさめるもので、一般的には木製のものが多い。

①　回答者の年齢は図1のような結果である。20代・40代を合計すると全体的に高い数値を占めた。これらの保育者が幼少時代に紙芝居を見た記憶の有無のアンケートをとったところ

●ある＝92%（460人中426人）
●ない＝ 8%（460人中37人）という結果が表れた。

NII-Electronic Library Service

92%の保育者が紙芝居を見た記憶があることから、紙芝居は保育教材としても使われており、記憶に多く残っているということが言える。「ある」と答えた者の中で演じてもらった相手を調べたところ、保育者という割合が70%となった。(図2) このことより保育者が演じる紙芝居の記憶の大きさが分かる。紙芝居屋さんと答えた方は40代以上が大半の割合を占めた。

② 舞台数の比率は図3のようである。台数の有無だけで数値をだすと、園に舞台があると答えた園は75園中65園で87%であった。ほとんどの園で紙芝居の舞台があるということが表れている。しかし、各園での舞台数を考えると、(幼) より (保) の方が比率が多いことがわかり、園に一台と答えたところは (幼) より (保) の方が多いことがわかる。この結果から、紙芝居に舞台は必要であるという関心の高さは、(保) より (幼) のほうが高いと考えられる。

③ 事前準備については図4のとおりである。

行事や季節にあわせたり、ねらいをたてたりといった配慮で紙芝居を選んでいることが分かる。子どもにその場で紙芝居を選ばせるという結果が得られた。紙芝居は絵本と違って先生に演じてもらわないと観ることができないので、この方法は子どもが喜ぶようである。しかし、この方法を行う場合は抜きの技術や紙芝居の内容を身に付けておかなければならない。下読みをする・抜き方の練習をするなどは、事前準備をするという点では、不足気味のようである。

童心社の紙芝居のケースの裏側等には「紙芝居のやり方」(又は)「紙芝居を楽しむために」が記されている。事前準備の項目のみを取り上げると下記のような説明書きが記されている。

1．必ず舞台をお使いください

2．下読みをしてください

3．画が順番通りに揃っているか確かめましょう

などとある。筆者自身も保育の現場に立った経験のある身として生活のサイクルの中でこれらの下準備をすることは、容易なことではないと理解している。しかし、「さっと抜く」「間をあける」などの技術をほんの少し、眼を通し、練習すれば紙芝居の効果がより高くなると推測している。

④ 実演方法については図5のとおりである。手でもっておこなうという結果が68%から、舞台所有率の高さに対して、実際の利用率の低さが表れている。また、紙芝居実演家の右手和子氏によれば、自身の著書の中で「お芝居が舞台の上で行われるのと同じように紙芝居も舞台という枠の中で行われてはじめて現実の世界ではない別の世界ができあがる・・・紙芝居の絵は舞台の中に入れて演じられるように描かれているのです。舞台を使うことでより効果的になります」(※1) やはり図3と図5の比較では「舞台はあるがあまり使用されていない」ということが明らかになった。実際の保育現場では「時間がない」「面倒である」という声があがっていることも事実である。このことについては、筆者自身もよく理解している。原因のひとつには、舞台や抜きの技術などについての、知識や情報が十分に伝達されていないためと考えている。これらを改善していくためには、紙芝居の特質をより効果的に伝えるために、今後、学生・保育者の方々に伝えることの必要が上げられる。アンケートからは、多くの園で紙芝居の舞台を所有していると答えられていたが、実際に活用している者は16%ということが表れた。

⑤ 絵本と紙芝居の利用頻度(100%)

●絵本58%に対して、紙芝居は42%であった。

児童文化財としての絵本は、質や内容について、その研究対象として取り上げられることが多い。しかし、この結果からは紙芝居も絵本と同様に児童文化財として多く利用されていることが表れていることから今後、紙芝居も重要視する必要性があることが指摘されている。

Ⅳ．まとめと今後の課題

日本で生まれ育った紙芝居、現在は主に保育の現場の中で活躍しているが、その歴史をたどると様々な時代の流れの中で変化をとげてきた。そして、テレビゲームやパソコンなど高度な機械化と科学化が進行している現在の中で『ＫＡＭＩＳＨＩＢＡＩ』が注目され、日本から羽ばたきはじめている。

今回のアンケート結果では、群馬県内における紙芝居の保育現場での活用状況を見ることが出来た。

研究結果では、紙芝居の技術などが伴っていなくとも保育者があたえる紙芝居は、子どもが楽しみ、好んでいるという現状や、紙芝居に関する自由記述の欄から、演じ手と観客・観客相互に「共感が生まれる」という声も述べられていた。しかし紙芝居は構造上、絵本のように子どもが自ら手に取り読むということが難しいゆえに演じ手の役割は大きい。まずは演じ手自身が紙芝居を楽しみ、それをきっかけに、舞台や演じる際の技術を身に付けるということでもよいと考える。

紙芝居は子ども達が集中して見るということで、子どもの行動をコントロールしてしまうのではなく、紙芝居の根底にあるさまざま魅力をたくさんの人が見つめてくれるよう、さらに追究し、今後の紙芝居運動に役立てていきたい。　　以　上

付記：短期間の調査にもかかわらずアンケートにご協力をいただいた幼稚園・保育園（保育所）の先生方には大変感謝申し上げます。

引用・参考文献

※1　右手和子，「紙芝居のはじまり　はじまり」，童心社，１９８６

※2　子どもの文化研究所　紙芝居研究会，「紙芝居２０年のあゆみ」子どもの文化研究所，２００１

※3　阿部明子・上地ちづこ・堀尾青史，「心をつなぐ紙芝居」，童心社，１９９７

※4　まついのりこ，「紙芝居　共感のよろこび」，童心社，１９９１

※5　上地ちづこ「紙芝居の歴史」，久山社，１９９７

※6　童心社，紙芝居「説明書き」より

NII-Electronic Library Service